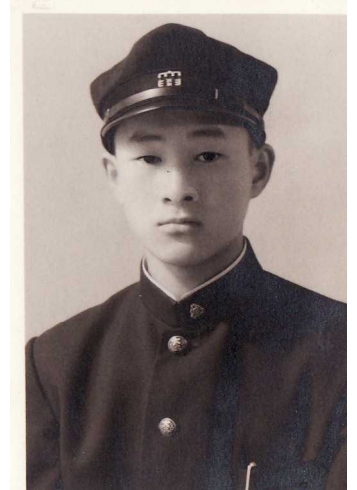


第5節 埼玉大学教育学部中学校課程 音楽専攻科に入学

1. 大学時代

親友・学友・友人

埼玉大学に入学した。友達がたくさんできた。高校時代から同じクラスだった数学科の小櫃俊夫君と親友になった関係で、同じ学年の数学専攻生ちと親しくなった。数学の内田君や黒川君や立川伊津夫君とも親しくなった。黒川君にはヘッセの「車輪の下」を借りて読んだ。立川君とは後に、春日部高等学校で同じ学年団を組んで一緒に仕事をした。小櫃君とは浦和で同じ部屋に下宿した。友達同士で一緒に酒を飲みに行ったり、青春を語り合ったりした。彼は後に秩父農業工業高校の数学の先生になり、私が秩父市秩父第二中学校の教員時代3年間まで親しく交際が続いた。音楽専攻科は14人、男は4人だった。男は4人全員が教師になり、定年まで勤め上げた。女は10人で8人教師になり、定年まで勤め上げたのは3人である。男で高校時代から家にピアノがあったのは2人だけ、女も2人だけだった。男ではピアノは私が1番上手だったが、女を入れると高校時代からピアノを持っていた二人には、到底かなわなかった。私は高校時代からお世話になっていた池田浩先生に、大学時代から卒業しても3年間ピアノのレッスンに通い続けた。レッスンを辞めた理由は、ショパンのピアノ曲を練習させてもらえなかったという単純な理由である。ショパンを弾きたかったが、曲をもらえなかったので、練習意欲が失せてしまった。



大学入学記念

音楽生活

昭和34年10月の東京芸術大学の大学祭オペラ公演、H・パーセル作曲「ティドとエアネス」本邦初演を見に行った。昭和35年6月のNHK交響楽団の定期演奏会、昭和36年のイタリア歌劇団公演の「西部の娘」、昭和37年8月の東京交響楽団の特別演奏会、プログラムに公演年が掲載されていないが二期会オペラ公演「リゴレット」等を見た。

昭和37年度埼玉大学祭コンサート(11/25)で音楽専攻生会長である私の挨拶文と、音楽部長小高秀一君の挨拶文がプログラムに掲載されており、女子学生達のソロや二重唱、ピアノ二重奏をはじめ、小高秀一君と私の二重唱、北沢秀夫君のチェロ独奏、埼玉大学合唱団の混声合唱、埼玉大学オーケストラが演目に入っている。昭和38年1月25日(金)埼玉大学教育学部二番音楽室で卒業演奏会が行われた。私はプログラム1番でシューベルトの即興曲Op.142-3を弾いた。

作曲は小さいときから興味があった。1曲完成するごとに大変感動した。5線紙に随分書いたが、作曲ノートに書いた曲以外は、散逸してしまって残念ながら今は残っていない。作曲ノートに書かれた最初の作曲年代は1959年だから、19歳のときだ。もっと前にも作曲していたが、ピアノがまともに弾けないときに、どうやって作曲していたのかと思う。作曲ノートに書かれた曲は、拙い曲だが出来上がったときの喜びようは、今の比ではなかった。

2. 大学時代の手記一抜粋一

昭和34(1959)年 4月26日(日) 晴れ

ついに大学合格が神から授けられ、勉強がはじまった。僕は幸福の絶頂にある。ラッキーボーイはその名の通りである。角帽をかぶり、革靴を履き、一間を借りて自由に生活をおくっている。こんな幸福がどこにある。この世で自分が一番幸福であると思っている者が一番幸福なのだそうだ。僕は呑気に試験勉強をして、苦しんで合格し、合格の喜びに一瞬酔い、金に苦しみ、苦しみから解放されて野心を持った。

彼は僕を完全に信用しきっている。悩みを全部打ち明けた。人生観を持たない自分の惨めさ、初恋の苦しさ、全くいじらしく思われてきた。しかし、一面うらやましくもある。自分が如何に彼と人格的に遅れているか。それを考えると自分というものが情けなくなる。とにかく僕は彼の話し相手にならなくてはならない。全力を尽くしてやるのだ。また、自分に悩みができれば、まっさきに彼に相談してみる。それまで友情が続いているだろうか。

1959年 8月 31日（火）晴れ

僕は確かに音楽は好きでも、才能はあっても天才ではなかった。しかし、音楽の勉強はできる。努力は続けられるのだ。確かにいまは手遅れだ。僕が天才であったとしても、音楽はものごころつく前に、親からの、先生からの導きが必要だったのだ。音楽の興味は小さいときからあったのは知っていた。小学校のときに作曲してみた。しかし音に対する勘、楽器練習といったものを、もっと小さいときからやっていたら…。十歩も二十歩も遅れてしまったのだ。しかし努力はできる。たとえ技術は劣っていても曲は作れるのだ。大曲でなくても曲は作れるのだ。作曲の勉強をするのだ。努力に努力を重ねて…。



秩父にて

作曲の勉強をするのだ。努力に努力を重ねて…。

昭和35(1960)年 5月 9日（日記帳が新しくなったので曜日と天候の記入欄がない）

僕は一人尊敬できる人が欲しい。考えの優れた人が。そして僕の疑惑を取り除き、理想の方向へ導ってくれる人が欲しい。一応は自分は尊敬されている人間かも知れない。また、ある方面においては、確かな考えをもった人間かも知れない。しかし僕は、この頃自分という者が卑しい人間に思えて仕方がない。自分の考えの逐一に疑問を持ってきた。

以前のように「自分ほど誠実な人間がどこにいるのだろうか」と言う考えは、いつのまにかどこかへ消えている。これからの僕は、どのように生きていくべきであろうか。自分の人格を磨き、より一層人から親しまれる人間になりたいものだ。が、僕はその前に、自分自身から尊敬でき、自分のよき指導者となってくれ人が欲しい。いまのところ僕の前にある道は、実に険しい道だ。一寸つまずくと、どんな方向にころんでくか見当もつかない。僕には悩みが多すぎる。僕には信用できる人はいても、尊敬できる人はいない。気持ちの揺るぎない、考えの確かな人が欲しい。その人こそ、僕の悩みに適切な考えを与えてくれる人だ。

1960年10月15日

日記をつけなくなってからおよそ一ヶ月、随分長い間休んだものだ。我ながらよくもこんなに精神の平常を保っていられたと感心する。この頃の僕は、以前の僕と比べて、考えが単純になってきたと思えてしかたがない。考えるには考える。また自分を反省することもある。しかし、以前のように迷わなくなった。精神が安定していたのかも知れない。

しかし今は違う。自分の精神の一本気なのに気づいた。もっと知識を深めなければいけないことに気づいた。自分はまだ深く考え、もっと音楽の知識や技術や一般教養を多く知らなければいけないこと気づいたのである。

いままでの自分では、このまま年を取っていったのでは、自分自身何の人格的進歩もない。本当に横ばいである。考えの広さがなく、今度は深さを、また考える素材を知らなければならぬ。今の僕は悩むことが多い。神経質であっても、そのことで、くよくよすることが少なくなった。全く気持ちが落ち着ききっているのだ。良くない。どう見ても僕たちの年頃には、もっと悩み、もっと泣き、もっと苦しまなければならぬ。そして、それを楽しむのだ。

1960年12月24日

今日はクリスマスイブ。これから小高、内田が来る。そして飲む…か。僕はこんなことでいいのだろうか。もっと勉強しなくては、もっとピアノを弾かなければ、もっと歌の勉強をしななければいけないのでないか。

今日は彼女のことについて自分の考え、自分の愛情、その他すべてについて書きたい。

僕は彼女と1年前から交際を始め、今日まで来た。それ以前は交際といえないような、ごく浅いものであった。「彼女は僕をどう思っているか、おそらく心の底から愛しているにちがいない」などど、とりとめもなく思いめぐらしていた。そして1年前の2月24日、彼女は僕に愛の告白をした。予想はしていたものの、言葉の言い回しや内容の鋭さに驚いた。それは半分脅迫的に僕には受け取れ、あまりの真剣さに驚かされた。それから1年経った今日、僕は彼女に理想的な愛情を寄せている。彼女は僕よりも背が低い、顔立ちも美人とはえないかも知れない。それは愛情には何の関係もないことであることがわかった。しかし僕が人間であらう以上、他人を意識する。僕一人の胸中で考えるのみでは、顔立ちなど眼中にないことではあるが、やはり僕たちを見る他人の目を意識させられ、考えなければならぬ今、このように考え、書き込む必要のないことまで書かされるのである。



もうあれから2週間、あれから2週間経ったのだ。僕は…、僕は、ああ、母から、父から、姉から情容赦のない恥辱を受けた。恥辱だ、軽蔑だ。肉親にとって僕など何の必要もないというような…。馬鹿だ僕の家族どもはみんな馬鹿だ。欲や虚栄ばかりに気をとられて…。彼らは、この世で一番美しい、真心のふれあいというものを知らないのだ。馬鹿野郎!阿呆!ああ…。泣け、泣け、気の済むまで泣け。前の親たちは、彼女を理解していないのだ。あるいはこれからも理解できないだろう。彼らに取っては美人で、親に従順であり、彼らが気に入る女性がよいのだ。あるいは私がかくれて恋愛をしているのにも入らないのだ。私が、あまりに気がよく見えるので、やたらに怒って見たくなくなるのかも知れぬ。とにかく彼女は美人とは言えないかも知れないから、そう思われているから彼らには気に入らないのだ。僕はどしたらいいのだ。

僕はこの下宿にいて、まともな人間で生きていけるだろうか。正常な気持ちの持ち方をして…。この下宿にいて、ろくな事を耳にしな。模範になるようなことがなされているか?自分自身変な人間になってしまひはしないだろうか、そればかり心配している。本当に今日一日、瞑想にふけてばかりいて、何も手につかなかった。

あいつ。一体あの人間は、どんな人間なのか。日常の会話にバーの話をも自分から進んでする奴には、まともな人間はいない。小櫃だって、僕以外の人間が見れば、本当に真面目な人間だとは思えない。いやだいやだ、僕は頭が変になってしまひそうだ。ノイローゼになってしまひそうだ。小櫃はバーに通い、バーの女とデートをし、そして酔いつぶれ、あげくのはてには、あんなことまでしでかすとは。ああ、何と言うことだ!あいつは、あれでも医者になる資格があるか?僕の寝ている同じ屋根の下で、同じ飯を食べいる人間が。

昨日の晩、町田さんとシーちゃんとあいつと4人で11時頃まで話をしてきた。その後シーちゃんをあつが…。シーちゃんは寝床から逃げ出した。あいつは話をしてるときにOKしたと思ったという。馬鹿だ。ありゃあ馬鹿だ。犬畜生に違いない。ババが普通の人間ではないと彼は言うが、あいつ自身だって普通の人間ではない。

1961年11月21日

僕は専攻生の会長を辞めようとしている。

辞めた後のことはあまり考えていない。いまの僕が専攻生の会を愛していないわけではない。どんなに今の専攻生の中のことを考え、将来の状態のことに気を遣っているかわからない。僕は会長を続けたい、後の半年を会のために尽くしたい。しかし今の専攻生を考えと仲間同士の雰囲気、盛り上がり、親睦について考えているものがあるだろうか。専攻生の会がどの位価値があるのか、どういう意味があるのか、なんのためにあり、目的がどこにあるのか。熟知して、それに努めている人間が僕を除いて何人いるだろう。一人もいないのではないだろうか。僕でさえ、この頃はここに価値があるのかわからなくなった。

会長になってから半年、僕が感じたものは、会の目的どころか正反対のものばかりであった。いがみい、自分可愛さからくる責任逃れ、私への嘲りの眼、「お前くらい馬鹿な人間がどこにいるものか」「一そんなことをして、どこが良いのだ。お前くらいお人よしはいないだろう」「僕はお前なんかにかまっていれない。自分の勉強とアルバイトがあるからな。せいぜい一人でヤキモキするがいい」というように感じれる。そうなのだ。一人や二人ではない。

専攻生全員だろう。そうでない人間が珍しいくらいである。親睦や交流など一切認めていない。自分のピアノ、声楽の勉強が大切なのである。そして、数日後に迫っている自分達の唯一の演奏会さえ無視している。

僕は彼らに会長として選ばれたのだ。適任者として絶対多数の賛成を得て選ばれたのだ。その賛成は専攻生の会が脳裏にあったはずだ。そして数日後に迫っている演奏会のことも考えていたはずである。何と卑劣だろう、何と考えの浅い無計画な人間どもであろう。この大学に、彼らは何をしに来たのか。の現実。僕は音楽専攻生の会の会長を辞める。

1961年11月30日

研究発表会の後会長を辞任した。理由は次のようなことを述べた。①音楽専攻生の会員が利己的である。②専攻生自身が会を無視している。③僕も音楽専攻生である。だからピアノを弾き、歌も練習しなければならない。諸君の考え方なら専攻生の会もない方がよいと思う。④就職活動と卒業演奏会が控えている。⑤私の熱意に対して、専攻生は嘲りのような態度しか見せなかった。これに対して専攻生の言いは①オーケストラはやらない方がよい。②音楽部と専攻生の会とのけじめをつけろ。③小菅さんは高望をしすぎた。④今度からよくやりたい。⑤大学祭を始める時期が遅すぎた。⑥音楽練習室の清掃は、班をきちんと決めてやるべきだ等がでた。

※私たちの学年の担任は三村先生だったが、内申書の所見欄に「自己顕示の傾向がある」と書かれた。今思えば当然だろう。このような私の言動は、間知らずな若造の戯れ言だ。

1962年4月9日

僕の人格は、すでに一つの形のものに固まりつつある。この6月で22歳になる。もう一人前の人間から一つの人格が形成されても良い頃かも知れない。しかしまだ僕は若い。まだまだいろいろなことを経験し、それを受け入れ、考え、より幅の広い柔軟な人間性を身につけたい。自分自身に望む人格者は一室に閉じこもった学者のような自分になりたいことだ。俗世間のあらゆる雑用から離れて、音楽理論を全面的に研究して、それを自分で自由に使いこなす、歌曲、ピアノ曲を作る。そして最後に映画歌劇を自の一生の大作として残すのだ。それは音楽を愛する者へ、この上ない感動作であって欲しい。何故な小説による感動が音楽的に表現され、一言一言に旋律がきざまれ、はげしい部分では大管弦楽と歌曲小説の言葉とともに聴衆に訴えてくるからである。映画歌劇は劇であっても劇映画の如く演技が完璧であり、しかも歌劇の如く音楽面においても力を持っている。

この映画は無論序曲もレティタティーボもある。管弦楽で奏で、ダイナミックにまた極めて素朴に物語れる。おそらく、これは今までの音楽の終着駅となることであろう。絶対音楽的要素、標題音楽的要素歌曲、その他あらゆる音楽を全部含めた音楽の音楽。つまり今まで行われてきた音楽の感動を一作にまとめ、聴衆に音楽から味わえるすべての感動を与えたいのである。これが僕の生涯の仕事である。横道それたかも知れないが、このような自分になりたい。そのためには、俗世界の雑用で頭がいっぱいにな自分であってはならないのだ。

僕の今までに見た人間は、人間の一生にすべき最小限事柄を行っただけで一生を終わらせようとしている。それは自分の生活の中で糧を働いて取り、そして自分の生んだ子供を育て、その面倒を見て、一生を終える。何て変化のない、意味な一生だろう。そしてこの人間の考えることは、他人を恨み、喧嘩をして、また笑っているだけ。つまりは自分の周り雑用、目先の事柄しか考えずに、それで満足して一生を終るのだ。それでも世間では何も言わず、名の通った人間となる。僕はそんな人間にはなりたくないのだ。



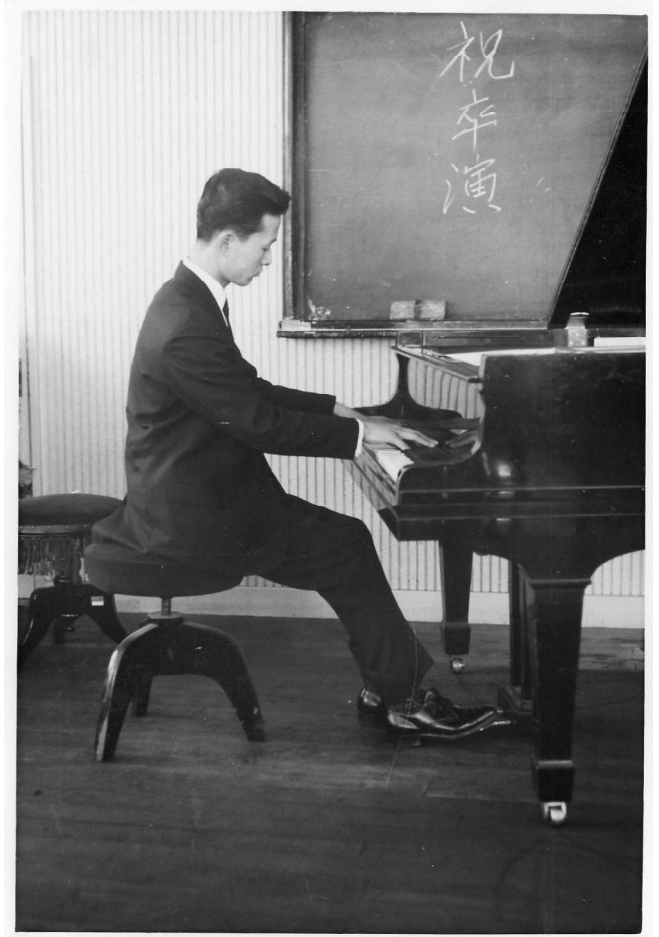
1962年7月 父が撮影

だから一切の雑用を超越し、自分の精神の世界を作りたい。しかし今までの芸術が行ってきたように、片寄った人格者になりたくない。それは雑用をはねつけ、自分の妻子を見放すような人間にはなりたくない。やはり良き夫、また良き父となり、その上に我が芸術に専心するのだ。また、良き隣人となって。

それは精神修養を今のうちからやらなければならないのだ。環境も自分で作らなければならない。我が家を作る。自分の世界を自分で作るのだ。僕が僕に望むこなのだ。世間の人間にはそれがない。自ら築こうとする努力がない。他の人間には意欲がない。いや知らないのだ。

僕は自分が分からない。僕は人に嫌われたくない。高慢な自分になりたくない。頑固な僕になりたくない。意地っ張りな僕になりたくない。他人を卑下する僕になりたくない。しかし他人より一段上に立って自分の芸術を築きたい。

僕には僕が分からない。他人を笑う僕が恐ろしい。そう言う僕になりたくないのに、そう言う僕になりい。つまり人の上に立っても、人を笑いたくない。



卒業演奏（第二音楽室）